

# 教 仏 名 聞

第65号  
 (発行日)  
 2016年2月1日  
 発行所：真宗大谷派念佛寺  
 〒6638113 西宮市  
 甲子園口2丁目7-20  
 電話・FAX (0798)  
**63-4488**  
 (発行人) 土井紀明  
 mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp  
 http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》  
 ○ 〈同朋の会〉  
 毎月22日 午後2時始。  
 ○ 〈念仏座談会〉  
 毎月2日と12日 午後3時始  
 ○ 〈聖典学習会〉  
 毎月6日 午後7時始。  
 ○ 〈真宗入門講座〉  
 毎月18日 午後6時30分始。  
 \* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 安楽声聞菩薩聚

安楽声聞菩薩聚

人天智慧ほがらかに

身相莊嚴みなおなじ

他方に順じて名をつらぬ

(浄土和讃)

現代語意識 (安楽浄土にまします声聞方や菩薩方、さらには人間や天人にいたるまで、みな同じように一切を明朗に知り通すさとり智慧を身につけておいでになり、またそのお姿も仏さまと同じ三十二相のすぐれた身です。声聞とか菩薩とか人・天などの別々の名があるのは、他方の世界に順ずる、すなわち浄土以外の世界であるところのこの娑婆世界で用いる名になぞらえて、釈迦仏が私たちに説かれたからです。それはこの娑婆世界の声聞や菩薩や、人、天など、どのような者も浄土に往生できるのであると、この世の人びとを浄土に引き入れるために、名をつらねられたのです)

《以下、問答》

N 「親鸞聖人のこのご和讃は何を根拠にしてつくられたのでしょうか」

D 「曇鸞さまの制作された『讚阿弥陀仏偈』の中の

安楽の声聞・菩薩衆、人天、智慧ことごとく洞達せり。

身相の莊嚴殊異なし。ただ他方に順ずるがゆえに名を列ぬ。

の文をそのまま詠われました」  
 N 「このご和讃はどういうことをいおうとされるのでしょうか」

D 「浄土真宗のよりどころである浄土の経典(三部経)、ことに大無量寿経などを拝読しますと、阿弥陀仏のお浄土(安楽浄土)には、ここに出てますような声聞とか菩薩とか人とか天などがましますように説かれています。そうすると極楽浄土は仏さまたちばかりかという、声聞や人など以外の、まだサトリを求めている菩薩や、一般の人間や天人のような未ださとしていないものたちがまします。そうなる浄土といっても雑多な

うなんですと、曇鸞さまや親鸞聖人がもうされているのです」

N 「では個々についておたずねしますが、声聞とはどういうお方ですか」

D 「声聞はもともと、釈迦仏(釈尊)のそばで、釈迦仏の説法の声を身近に聞いていた仏弟子の意味です」

N 「釈迦仏の説法の声の直に聞いて修行をしていた沢山のお弟子がいましたね。そういう人はまさに読んで字の如しで声聞であったわけですね」

D 「ええそうです。もともと、後代には大乘仏教の側から、声聞は自分のサトリを求めらばかりで他者を救おうとしないう者として批判的にいわれるようになってきますが、ここではそういう批判的な意味ではありません」  
 N 「阿難とか舍利弗とか目蓮といった仏弟子たちは声聞といってもいいのですね」  
 D 「ええそうです。そういう点からいいますと、私たちが

いわばこの娑婆世界とそんなに変わらない世界ではないか、という疑問がわいてきます。それにたいしてこ

お念仏を申し、そのお念仏の声を聞いていることは、阿弥陀仏の直説法を聞いていることですから、私たちは阿弥陀仏の(声聞)であるともいえましよう」

N 「お念仏を称え、聞いている私たちも声聞といえるのですね」

D 「そういえるのではないでしょう。阿難とか舍利弗とか目蓮は釈迦仏の説法の声聞いた声聞ですが、私たちは阿弥陀仏の説法の声聞いてる声聞です。そしてその声に育てられ、この声に救われていくのです。有難いです」

N 「阿弥陀仏の直説法を聞くのがお念仏といわれますが、そこをもう少し詳しく言ってください」

D 「私たちに与えられた行は南無阿弥陀仏を称える一行です。ですからナムアマミダブツ、ナムアマミダブツと称える生活が人生の中心になりましよう。そしてナムアマミダブツと称えると耳にナムアマミダブツとおのずと聞こえますね」  
 N 「ええ」  
 D 「その声は私の声であるという面とともに、阿弥陀仏が(ナムアマミダブツ)と私に喚びかけて下さっている仏のみ声なのです」

N 「阿弥陀仏の（お喚び声）とよくお聞きしますね」

D 「ええ、阿弥陀仏がナムアミダブツと私目当てに喚びづめに喚んで下さっている声、それがお念仏の声です」

N 「喚んで下さるナムアミダブツはどういうお心ですか」

D 「それは濁悪の私たちに（ここに汝とともにいる）（助ける）（引き受ける）との阿弥陀仏の大悲の仰せです」

N 「有り難いですね」

D 「阿弥陀仏の声を聞くだけで助かるのです。そういう意味で私たちは阿弥陀仏の声聞ですね」

N 「では菩薩とは」

D 「菩薩の意味は広いですが、もともと菩提（さとり）を求め衆生（薩埵）のことです。さらには自分のさとりだけではなく人をさとらせていこうとするお方のことです」

N 「では天とは」

D 「天という漢字のインドでの原語はデーヴァで、インドの神さんをさします。大黒天とか吉祥天、弁財天などといいますね。中国語で天は神さまのことです。神々は人間世界の上に居て、仏に帰依して、自らが仏法を求めただけでなく、仏法を護持し、お勧め下さる方々であると説かれてい

ます」

N 「そうすると日本の神さまもこのように了解をしたらよろしいのですね」

D 「ええ、そうお聞きしていただきます。ですから神々をそしつたり軽べつしたりすることは良くないことで、神々は仏法をおまもりして下さり、仏法を私たちにお勧め下さるお方として尊びなさいと親鸞聖人は教えて下さっています」

N 「多くの人はしばしば神々に祈り、厄払いをしたり健康長寿を祈ったりしますが、それはどうなのですか」

D 「神々に自分に都合のいいご利益を祈願していると、自分の欲求ばかりに目がいつて、私たちに掛けて下さっている仏の願い（誓い）を見失うようになつてしまいます。真実に基づかないご利益を求め祈りは、空中に家をたてようとするようなもので、単なる当てに過ぎないものを当てにしているすがたです。気休めに過ぎませんから、いつまでたってもまことの安らぎは与えられません」

N 「もとにもどりますが、大無量寿経などのお経を読むと、極楽浄土といっても、声聞や菩薩や神々や一般の人などの

いまださどつていないものたちが沢山いる、そうすると浄土といつてもこの娑婆世界とそんなに変わらない世界ではないかと、そういう疑問に対して、このご和讃ではそうではないのだといわれるのですね」

D 「ええ、浄土はそういう方たちを浄土に生まれさせて下さつて、同じように

### 人天智慧ほがらかに 身相莊嚴みなおなじ

で、皆おなじく仏の（明らかなさとの智慧とすがた）を具えておられる、と仰せられるのです」

N 「浄土では皆おなじ仏であるのになぜ、あたかも浄土に声聞や菩薩や人がおられるように説いてあるのですか」

D 「浄土は不可思議な領域です。軽々には断定できませんが、およそ二つの理由をうかがうことができます。一つは、阿弥陀仏は浄土の主体です。いつてみれば救主としてのはかりない徳をもつておられます。その阿弥陀仏の功德を私たちに表わし示すときは、阿弥陀仏の説法を聞くお方、阿弥陀仏に導かれるお方が伴うことによつて阿弥陀仏の広大なお徳が私たちに知らされます。もし阿弥陀仏ばかりで、だれもその説法を聞いたり導かれる方がおられないようなら、阿弥陀仏の廣大無辺な功德は私たち凡夫には感じられません。ですから、釈迦は、阿弥陀仏は浄土の主であると言われ、ともに、救主である阿弥陀仏を讃歎し、その教えに従っている方々として娑婆世界での菩薩や声聞や天人（神々）という元の名で、説かれているのです。それによつて私たちは阿弥陀仏と浄土の尊さを知ることができるといえます」

N 「二つ目は」

D 「浄土に生まれて仏になつた方々は、もと娑婆世界ではさまざまな方々（声聞・菩薩・人・天）でしたが、阿弥陀仏の本願に助けられて同じ無上覚という仏のさとりを開かれる。そのようにどんな者も阿弥陀仏の本願のお慈悲によつて浄土に往生できるので、私たちに阿弥陀仏の大悲を知らせるために、娑婆世界の名で説かれたのだと、そう教えられているのです。誰でしたか、（昔の名前で出ています）なんて歌の文句にありましたね」

N 「ここの身相莊嚴とは」

D 「仏のお姿は（三十二相八

十種好）という素晴らしいおすがたをしておられると経典のあちこちに説かれております。いわゆる仏のお徳を讃えた言葉です。ただ（三十二相八十種好）はもともと娑婆世界の釈迦仏の相（すがた）を讃える言葉です。ここでは浄土の仏たちの、さとりの功德によつて現れる仏身の相の素晴らしいことを（身相莊嚴）といわれているのです。浄土の仏の身相は三十二相の姿を具えているといふふうには、これに説かれています。これはこの世の釈迦仏の相に寄せて浄土の仏のおすがた（相）の勝れていることが説かれているといえます」

N 「では浄土の仏の真の相はどのようなおすがたですか」

D 「浄土の仏の身のおすがたは、どうであつたか。それについてはこの次のご和讃に出てきます。それによりますと、

### 虚無之身無極体

といわれるように、色やかたちでとられることができない無限定な相であるとお示し下さっています。私たち凡夫のイメージでとらえることができないのです。これについては次回にまた申し上げます」

N 「ということは大無量寿経に説かれている浄土の仏のお

すがたはこの娑婆世界にいる私たちがイメージしやすいように私たちの思いに近づけて釈迦仏が説いて下さったのですね」

D「ええそうなんです。私たち愚かな凡夫が浄土のすがたとか浄土の仏のおすがたを認識することなど到底できません。そういう愚かな凡夫に、浄土の有り難さ、仏さまたちの尊さを知らせ、浄土に生まれてほしいという願いをおこさしめて下さる。そういう釈迦仏のご親切による説法がお経のお言葉なのです」

N「釈迦仏のお言葉を聞いて、ああ有り難い。私も阿弥陀仏に助けられて浄土に生まれて仏さまにしていたきたいという思いがわいてくるのですね」

D「ええそうです。仏はへすがたかたぢのなにお方」とばかり説かれると、私たちはイメージできませんから、浄土に生まれてほしいという願いをなかなかおこさないでしょう。また、釈迦仏のそういう説法を聞かなくては、私たちはこの娑婆のことしか知らず、この世界で長寿健康だけを願って、そこにばかり目が向いて、真実の領域を求めようとせず、いつまでも流転を重ねる

からです」

N「なるほど、確かに私たちは娑婆での都合の良いことばかりを願っています。しかし、

実際にはこの身体は一瞬一瞬老化し、死へと急ぎつつあるという紛れもない事実の前にオタオタするばかりです」

D「ええ、生まれて老いて死んでいき、死んでどこへいこうとしているのか、何もわかんないまま、道がつかないまま、ただアテにならない長寿健康ばかりを願って生きていく。それは、どうにも道がつかないあがきのあらわれともいえましよう。生まれて死ぬしかないと思つて不安でウロウロしている私たちに釈迦仏は、生まれて死ぬるとい根本的な閉塞を超える道を、愚かな私たちに説いて下さるのです」

N「なぜそのようなことを釈迦仏は説けるのですか」

D「それは仏陀（釈迦）とは、生死を超えている不死のいのち（無量寿）を覚醒されたお方だからです。そこで、死なない道の門を開かれたのです」

N「お念仏の道も不死へいたる門なのですね」

D「ええそうです」

(了)

## 松並松五郎師のことども

①

先年、『松並松五郎念佛語録』

を出版しましたが、松並師のおられた奈良の念佛堂に昭和六十年ごろより毎月のように通うこと十年。その間、直接師からお聞きしたことや逸話など、この『念佛語録』に書かれていないお話しが幾つかあります。それも年月を経るうちに記憶も薄れ、忘れていきますので、今もまだ憶えていることをここに書きためてみたいと思います。記憶が定かでない点がいろいろありますが、その内実はお伝えできると思っています。

\* \* \*

私（住職）が、松並師の念佛堂を初めて訪ねたのは十八歳の時です。京都の大谷大学の一回生でした。大学の寮（育英寮）で向かいの部屋に三重県出身の水谷葵君がいて、ある日、彼が「奈良に大変有り難い人がいる。一緒に訪ねてみないか」と誘われたのです。近鉄の畝傍御陵前で下車し、そこからかれこれ歩いて二〇分。民家風の建物が念佛堂で、そこで初めて松並師にお会いしました。お歳は五十歳を過ぎた頃だったと思います。風貌は普通の田舎のおじさんと

この時のお話しの中で一つ思いたすのは、

「この前、金沢の念仏者の家に行き一晩泊めてもらうた。その晩、お腹が痛くなった時、その主人がへこのクスリ飲みなさい」いうて、クスリをもつてきてくれましたん。それで何のクスリかも聞きもせずそのまま飲みましたわ。アツハツハ」という話でした。その当時の私はこの話を聞いて、別にどういうこともない話だと思ひ、師が笑いながら話をされたのがむしろ不思議な感じがしてました。松並師のお話しはこういう調子で、日常的な話を通して深いご信心のお話しをされました。このクスリの話にしても、これは歎異抄第二章の「念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもつて存知せざるなり」との聖人が「ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべし」の仰せのままに信じ称えるという、ご信心そのもののお話でしたのにな。その頃の私は分かりませんでした。

(続)





# 信心夜話

木村無相師の言葉

「信心の、特益とくえきというのは、何か信心いた  
だいたら特別なことがあるように思うけ  
ど、その錯覚を除いて下さって、信心いた  
だいてもただかなくても、まったくの素  
人と同じじゃということをおハッキリさして  
下さるの。」

欲が起こつたり腹を立てたり、疑ったり、  
はからつたり、普段の人とちよつとも変わ  
らんということをおハッキリさせて下さる。  
じゃから普段の生活に迷いがなくなるの。  
これが人間じゃ、これが自分じゃ、これが  
人生であるということが、おハッキリさせて  
もらえる。」

\* \* \*  
この木村師の言葉は師が亡くなられた三  
日前に、病床で私が直接お聞きした最後の  
お言葉です。語気を強めておっしゃったの  
をよく憶えています。木村師は、二十歳か  
ら道を求めてから六十年、しかも臨終間際  
のお言葉ですから、いつわりもかざりもな  
い、真実ありのままを述べられた貴重なお  
言葉だと思います。

真宗の教えを聴聞しはじめると、すぐに  
聞かされることは、私たちは「煩惱具足の  
凡夫である」と教えられます。ですから、  
この木村さんの言葉は、特別な言葉ではな  
く、当然至極のように聞きながしてしま  
います。

ところが、私たちは本当に「自分は煩惱  
具足の凡夫である」とおハッキリと決着がつ

いておるかとい  
うと、アタマではそ  
うだと分かつてい  
ても、身に付いて「自  
分の心の本性は煩惱  
である」と感じてい  
ないのです。あの『念

佛法語』(伝。源信和尚)にも

『妄念はもとより凡夫の地体なり。妄念の  
外に別の心もなきなり』

とあるのも同じです。妄念(煩惱)がわれ  
ら凡夫の心の生地であり、煩惱の外に私た  
ちの心はない、というまことにきびしいお  
言葉です。

さあ、本当に私たちは自分の心が妄念煩  
悩の外にないと、感じていくかどうか。

木村師は長い聞法求道のあかつきに、自  
分の心は「欲が起こつたり腹を立てたり、  
疑ったり、はからつたり」で、その外に自  
分の心はない、それゆえ一般の人と長年仏  
法を求めてきた自分と、心はちつとも変わ  
らない、同じだといわれるのです。

ただ聞法してきた結果、おハッキリと自分  
の心の本性、煩惱具足が本性、ということ、  
そのことがおハッキリとして、もはやそのこ  
とに迷いが無いといわれるのです。自分は  
どういふ存在か、人間はどういふものであ  
るか、煩惱具足の人生はどういふものか、  
それがおハッキリした、といわれるのです。

そして、そうおハッキリと知ったのは自分  
の認識力とか知恵によってではなく、たま  
わった信心の智慧によって知らされたこと仰  
せられるのです。凡夫の心で凡夫の心の本  
性、自性は知れない。煩惱のまっただ中に  
ある者が煩惱妄念の外に自分の心はないと  
は知れない。自分の心では自分の心は分か  
らない。自分の心を超えた仏心の光に照ら

されて自分の心が知らされる。煩惱を超え  
た信心の智慧(仏智)の働きによって知ら  
されると、木村師はしばしば仰せられまし  
た。

仏法を聞き聞きするといつものまにか、仏  
心が潜み入って、自分の心は煩惱妄念より  
外に何もないと、おハッキリと照らし出され  
ると、木村師は晩年なんども仰せられまし  
た。

そこで、教えを聞いて「よう分かりまし  
た」と、自分の分かったことに落ちつこう  
とすることもいらず、かといって「分から  
ぬから、自分はだめだ」という必要もない  
のです。

自分の判断で「分かった」も妄念なら「分  
からぬ」も妄念。どちらも凡夫の妄念の心  
であるとおハッキリと知らされているから、  
自分の心をちつとも頼みにせず、いよいよ  
お聞かせ下さる南無阿弥陀仏に助けられる  
ばかりであると知らされます。

「有り難い心が起こるから大丈夫」とい  
うのも凡夫の思い、「有り難いとは思えな  
いから助からぬ」というのも凡夫の思い、  
どちらも助かるタネにもお助けの邪魔にも  
ならない。

「自分は阿弥陀仏を疑っていないから大  
丈夫」と思うのも、「自分の中には疑いが  
あるからダメだ」というのも、どちらも凡  
夫の思い、阿弥陀仏のお助けに一指もでき  
ません。

自分の心はチリばかりもお助けの足しに  
はならないのであり、また邪魔にもならな  
い。自分の心は煩惱ばかり、何一つ仏に  
なるタネも浄土に生まれる縁も、助かる手  
がかりもない、まるまる煩惱妄念ばかり  
で「助かる縁は一つもない」とおハッキリと  
知らされている。

いよいよ南無阿弥陀仏に「まるまるお引  
受いたたくよりほかはない」のであります。  
私が阿弥陀仏に「お助け下さい」と願おう  
とするとつくの昔から、私を助けたもう南  
無阿弥陀仏となって、しかも私に喚びづめ  
であり、そのお声がお念仏となって、私の  
口に現れ耳に聞こえて下さる。

そして

「欲が起こつたり腹を立てたり、疑ったり、  
はからつたり、普段の人とちよつとも変わ  
らんということをおハッキリさせて下さる。  
じゃから普段の生活に迷いがなくなるの。  
これが人間じゃ、これが自分じゃ」

と身に染みて感じているから、他者から「お  
前はお粗末な人間である」といわれても、  
「お前は冷たい人間だ」といわれても、「お  
前は自分のことしか考えていない」と非難  
されても、最初は凡夫だから腹もたつだろ  
うけれども、「本当に私はそういう人間だ」  
とそのつど自分の本性が知らされ、他者か  
ら非難悪口を言われても、それを受けいれ  
ていくゆとりすら与えられてくる。いわゆ  
る「普段の生活に迷いがなくなる」のです。

「自分はまともで、善人ですぐれた人間だ」  
と思っているから、人から批判されたり責  
められたりすると、それに反発して逆に相  
手を攻撃したりうらんだりして、人間関係  
がますます悪化することになるのです。

また他者が愚かな行為をしたり、あさま  
しい行いをしても、一方的にその人を責め  
たり非難するのではなく、「ともに同じ煩  
悩の凡夫、宿業の凡夫」「自分も同じ業の  
深い凡夫であつて、縁がくれば煩惱がわか  
上がつて何をしでかすか分からない者」な  
んだと思うから、他者に対してゆとり(寛  
容)をもって見ることが可能なのでありま  
しょう。